文学の杜

仙台文学館友の会会報

第64号
令和2年11月30日発行

仙台文学館友の会（仙台文学館内）
〒981-0902
仙台市青葉区北根2丁目7の1
電話　022（271）3020
仙台文学館のホームページ
https://www.sendai-lit.jp/

佐伯新館長からのメッセージ

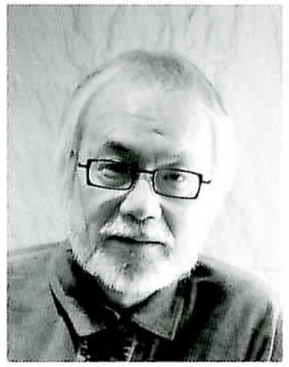
習慣のように集い、語り合える場を

館長　佐伯　一麦

今年度四月から、仙台文学館の第三代館長に就任しました佐伯一麦です。長く小説を書いてきた上で、世話になった仙台という土地に少しでも恩返しをという思いから、小池光前館長からのバトンを引き継ぎました。

これまでも、ゼミナールの読書会やエッセイ講座でお世話になってきました。友の会のメンバーの中にも見知った方がおられ、いつも心強く思っておりました。これまで同様、何卒よろしくお願いいたします。

あいにく新型コロナウィルス禍で、就任早々、臨時休館を余儀なくされるなど、皆さんにご挨拶できないままでおりましたが、九月からは、延期となっていた館長講座も、感染予防対策を施した上で再開することができて、ひさしぶりに参加者たちとの対面が叶い、嬉しく思っているところです。



エッセイ講座では常に、皆さんの作品を通して、人生の歩みや経験、人となりに触れることを、楽しみにしています。

機会があれば、友の会の皆さんからの要望やアイデアを元にした展示なども行っていきたいと考えています。また、親睦を深める行事等にも、都合がつけば、ぜひ参加させてください。

仙台文学館がこれからも、文学愛好者から文学創作を目指す者、言葉に魅せられたあらゆる年代の人々が、習慣のように集い、語り合える場となることを願っています。ことわざに「三代目で身上を潰す」というものがありますが、まだ続いている難所を皆さんと共に乗り切って、「三代続けば末代続く」となるように頑張るつもりです。

仙台が生んだ詩人土井晩翠を顕彰するための第61回晩翠わかば賞あおば賞の贈呈式が、10月18日、仙台文学館で行なわれた。

晩翠わかば賞は、仙台市立加茂小学校3年田中基さんの「米とぎ」。晩翠あおば賞は、仙台市立宮城野中学校3年菅野一彩さんの「いのり」に決まった。応募作品は東北地方の小・中学生から、総数667編。ほかに優秀賞に選ばれたのは以下のとおり。晩翠わかば賞優秀賞は、宮城県大崎市・佐々木太一さん、仙台市・鈴木蒔登さん、宮城県登米市・佐々木柚寧さん。晩翠あおば賞優秀賞は、仙台市・藤田こころさん、宮城県気仙沼市・吉田美咲さん。

第61回 晩翠わかば賞・あおば賞

晩翠わかば賞・田中　基さん（仙台市）
晩翠あおば賞・菅野　一彩さん（仙台市）

文友一滴

梯久美子の『愛の顛末』を読んだ。副題は純愛とスキャンダルの文学史になっている。12人の作家たちの愛である。梯久美子は、その作家の愛、もちろん人となりを含めて知りたい意向から、足で歩いてこの一冊にした。この中で三浦綾子の愛をなんて不幸な、なんて幸せな一生だったと感慨深く読んだ。

思い起こせば大学生の時の下宿先で新聞連載の『氷点』をみんなで回し読んだ。あまり感想などを言わずもがなで軽く今日の場面はいいとか、考えられないことをする家族だとか短い言葉をかわしただけだけれど。今に至る読書会の先がけかな。新聞連載『氷点』の人気は高く映画やテレビで放映された。私は日常が忙しくてゆっくり見る暇などなかったのだが、反響は大きかった。当時は『氷点』を知らない人がいない様相だった気がする。その後、塩狩峠を読んだだけだが若い時に読んだ感動は忘れられない。

『愛の顛末』によると三浦綾子は小学校の教員をしていたが終戦後結核にかかり退職。医師をしていた幼馴染と結婚。夫もまた結核患者だったがために早世している。その当時結核は死病と呼ばれた感染症で多くの作家たちがこの病で倒れていた。今の新型コロナウイルスなんてものではなかったのだろうと思われる。二度目の結婚相手は光世氏。彼は三浦綾子を先夫ぐるみ愛して生活する。底にキリスト教があった。後年、たくさんの病を抱えた三浦綾子を口述筆記をして助ける。私は、先夫の病と早世にこの上ない不幸を思い、光世氏との出会いに幸せを感じた。

『氷点』の小説の中にあるあの林の中に建つ三浦綾子記念館に行ってみたいと思いつつまだ果たせていない。2年前、読書会仲間で計画を立てたが地震のために流れたままになっている。（一）

第45回読書会

笑いの底に横たわるもの

古山高麗雄「プレオー8の夜明け」

俘虜収容所であるサイゴン中央刑務所の朝は、囚人たちの歌声で明ける。日本人雑居房で吉永は今日も繰り返しの朝を迎えた。

房内では小さな軋轢もあるが、彼らにとって大きな救いとなっているのは吉永が脚本を書き、みんなで演じる爆笑芝居である。

作品全体に明るさと笑いが漂うのは、作者の優しさと人間性ゆえか。軽妙な表現の底に、戦争の持つ哀しみがひっそりと横たわっていることを感じさせる短編である。

収容所が、他の作家の作品より柔らかく描かれているとの感想が多く、どんな状況でも、人は生きがいや情熱が必要なのだとも知らされたのだった。

10月14日、8ヶ月ぶりの再開、新会員を迎えて8名参加。（佐）

次回読書会は12月9日㈬14時
スタインベック「逃走」（『スタインベック短編集』所収　新潮文庫）
※友の会会員は自由に参加できます。申込みは友の会事務局まで。

私と郷土と文学 ㉓

本欄を借り、何度か少年期を過ごした野辺地を紹介させていただいた。私の父親は野辺地駅に勤め、長らく改札係を担っていた。有名人が改札口を通ったことをよく話してくれたものだ。津軽三味線の初代高橋竹山には「ご苦労様だきゃぁ」と声をかけられたと自慢気に話していたのを覚えている。竹山は青森県平内出身で野辺地からは近い。椿咲く夏泊半島、白鳥の渡来地としても知られている。

視力を失った竹山が米や金銭をめぐんでもらうために、門付けとして三味線を弾きながら各地を放浪していたことは演歌「風雪ながれ旅」に歌い込まれている。生きるための三味線弾きに、民謡歌手成田雲竹との出合いが転機をもたらす。雲竹の伴奏者になり、安定した収入が得られるようになる。やがて独奏会を催し、ソロアーティストとしての地位を築いていく竹山。齢50を過ぎていた。

津軽三味線

私には民謡も津軽三味線の魅力も分からなかったのだが、津軽三味線の隠れ名人黒川桃太郎の生涯を描いた長部日出雄著「津軽世忘れ節」を読んだとき、胸に込み上げてくるものがあった。それは津軽の風土が生んだ調べが心の琴線に触れたことだったのかもしれない。平成10年、87歳で竹山はこの世を去る。死期が近づいた竹山は「最後はダメな自分を聴いてほしい」とバチを持ったという。

そこはかとない哀しみ、切なさを湛えた津軽三味線の音色。竹山の人生を重ねると、その音色は聴く人の心を揺さぶらずにはおかない。

♪破れ単衣に三味線だけば
よされ　よされと　雪が降る…♪
（其田敏美）

「私と郷土と文学」の原稿募集
約600字で会員のみなさまの原稿を募集します。文学館友の会事務局まで、お送りください。

風と歩こう ⑬

Photo by Ryuji Sasaki

文学館の門を車で入ると、駐車場までカーブした道沿いに緑の灌木が楽しめる。特に秋は群生する萩たちが左右から身をのりだして迎えてくれているようで心地よい。駐車場から歩いて玄関に向かうとき、私は右側の外階段にチラと目をやる。自動販売機コーナーの地面の、すぐ横に位置する階段の頂きは素っ気ない平らな景色なのだが、ある出来事から変った。

その日申し込んでおいた講座を受講するので、駐車場から歩いてきたら外階段に男の人の姿が見えた。ずんずんと上がってきたその人が講師と気が付いた。玄関前でかちあってしまい、どぎまぎしていると「やあ、こんにちは。講座受けるのだね？」と声をかけて下さった。一受講生にすぎない私は、立ち止まりもせず頷いただけで先に館内に入った。幸せな偶然はその後起きたことはない。それでも私は、鳥も憩う水場から正面玄関につづく階段の頂を、玄関に入る前につい見てしまう。（近）

編集後記

仙台文学館友の会会報「文学の杜」第64号をお届けします。

▽百聞は一見に如かずとばかりに出歩いている。その後に百見は一考に如かず、百考は一行に如かずと続く。聞、見、考、行、果、幸と続き、結果的にはみんなの幸せになるというのである。私は百聞は一見に如かず止まりではあるが一人歩きを初めてから知る楽しみを味わっている。（一）

▽新型コロナ禍で人の活動が減ったことで、大気汚染が改善して、40年ぶりにインドの町の上空にヒマラヤ山脈が見えるようになったそうだ。それに感動して、環境関連の仕事に就くことを決めた若い日本女性をテレビが伝えていた。久しぶりに癒されたような爽やかな思いを味わった。特別なことでなく人間がじっとするだけで、地球は健康を取り戻すのだと改めて思い知ったことでもあった。（近）

▽見切り品のワゴンに店員が大根を置いた。結構いい。ラッキーと買い物かごに入れる。皮を厚く剥いて、真ん中のいいところは生食用、残りは輪切りにして下茹でをする。皮は角切りと千切りにする。角切りは浅漬けに、千切りは味噌汁用に煮る。全部に昆布が入っている。家中が大根の匂いに包まれ、静かで幸せな時が流れる。（和）

▽スペイン、プラド美術館の絵の前で、その絵と同じ服装のダンサーがフラメンコを踊る映像を見た。床を打つ激しい踊りと静止する絵画の組み合わせはどうかと思ったのだが、やがて踊りによって絵の奥にあるものが次第に引き出されることに気付き、魅了された。美術館の大胆な企画に拍手。（佐）

この印刷物は再生紙を使用しています

特集「私のコロナ禍体験」

「私のコロナ禍体験」原稿募集に、多くの会員の皆さまからお寄せいただき、ありがとうございました。これまでにない体験をした私たちは、どのようなことを考え、どのように日々を過ごしているのでしょうか。この体験を今後に伝えていくためにも、皆さまからの声を特集します。

◆陽性者がなかった岩手県で、ひたすら在宅に努めていた私は、昨年3月以来のこまつ座公演を心待ちにし、新幹線も予約した。仙台市在住の娘に予定を知らせると、両親の感染を危惧し「来ないで」と言うが、チケットのキャンセルが不可能だからと、8月1日を待っていた。

しかしその前日、私が住む北上市にも陽性者が出た。久しぶりの仙台行きと観劇を、泣く泣く諦めるしかなかった。

（山下一）

◆私は、視覚障がい者の目の代わりになって活字を「音」にするシゴトをしている。いつの間にかライフワークとなった音訳ボランティア。情報センターからあらかじめ郵送されてきた原本をカードに録音して再びセンター宛に郵送する。郵便屋さん、さまざまである。

自宅録音者に限るが、幸いなことにコロナ騒動に関して私に影響はない。外出制限で音訳中心の生活に浸る事ができた。

（及川久）

◆コロナ禍に入ってよりあちこちの家で断捨離が始まりました。なにしろ在宅者が多い。ゴミ集積所はゴミ袋の山。ヨシ自分も断捨離をしようと思い立ち、書庫の本類をどんどん資源ゴミへ。その勢いにのって長年かかわってきたいくつかの催しから自分を断捨離することを決意。「もうお歳ですから辞めて下さいとはいいにくいでしょうからこちらから辞退させて下さい」と連絡。おかげで身軽に。

（佐藤通雅）

◆「コロナ禍の中、何をしたか」が、これからの人生に影響すると思います。生活の在り方を大きく左右すると言われていることも痛いほど分かります。この機会に、井上ひさし氏「短編中編小説集成」に挑戦しました。こんな有意義な時間は、わが人生になかった。この時間を生かさないのは怠惰。特に「十二人の手紙」のスタイル新鮮。仙台市・釜石市が何となく背景にあるようで読み込みやすい。

（豊島光喜）

◆コロナ禍による外出自粛ムードに従い、果ごもり生活を続けていたら、子供時代の日々を思い出した。カギッ子なので日がな一日家の中で過ごしていた。今にして思えば案外心地よかったことを発見。地球を汚す二酸化炭素を排出してまで、レジャーのため海外へ出掛ける必要などないことに思いを馳せた。今度、インバウンドのいない、密集とは無縁の静かな京都へ行ってみたいと改めて思った。

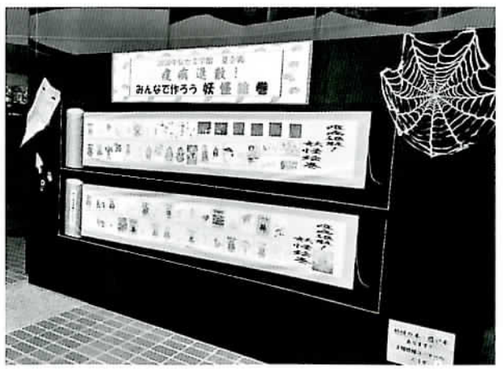
（高村龍彦）

◆私の自粛生活は三月五日から五月末までの朗読教室休講の形で始まった。まず書棚から八月観劇の井上ひさし「人間合格」太宰治「人間失格」津島美知子「回想の太宰治」を抜きとり読み直す。疲れた時はマスク作り。ネットで浅田次郎「流人道中記」上下「歓異抄をひらく」ほかを取り寄せ読書三昧の日々を過ごした。人とも会わぬ閑かな家居体験は得難い充実した時間だったと感謝している。

（沼沢郁子）

◆閉塞した毎日で希薄になった生きる手応えを感じたくて、小川糸「食堂かたつむり」を再読。主人公倫子がすべてを失い、十年ぶりに戻った田舎で、物置小屋を自ら食堂に改装し一人シェフとして再出発する物語。歯切れ良い語りに悲壮感はなく、身近に食材を探し歩き一日一組の客に工夫と心を込めて活き活きと料理を作るその姿に、私も幸せな気分になれた。一日も早いコロナ収束を願うばかり。

（T・H）



◆新型コロナウイルスは、千分の一ミリメートル。電子顕微鏡でしか見えないという。専門家もシロウトも大人も子どももみんなマスクをしている。マスクをとおして、一回一回呼吸をしている。だんだん疲れてきて余裕がなくなっている。正確に情報を判断し正しく恐れることを学ぼう。不自由ななかにも自分を支えてくれるものを持とう。この困難を、みんなで乗り越えよう。

（中村里絵）

◆自粛の日々がもう半年、皺や染みの顔でも、半分もマスクで隠しての外出などとても苦痛。仕方無くただ家に居るだけの毎日。そんな暇な婆さんに舞い込んだ文学館より『疫病退散・妖怪絵巻』募集の手紙。早速、見た事も会った事も無い

アマビエちゃんに挑戦。久し振りに楽しみ乍ら数枚も描きました。暇な連れ合い「随分肥ったアマビエだな」と、笑いますが「これで良いの！」と、満足の私。

（佐藤美知子）

◆新型コロナウイルス感染拡大防止のため仙台文学館は、緑豊かな環境にあり、心のゆとりを取り戻すためにふさわしい場所です。友の会には平成12年度からお世話になっています。疫病退散！妖怪絵巻展（8月8日～8月30日）に出品しました。一番良い所にかざっていただきました。百万人の年賀状展も18回出させていただきました。家で絵ばかり描いていましたので5kg体重が増えました。

（喜田章）

◆コロナ禍で予定していた2つの旅行が中止になった。そんな中、浅田次郎の「流人道中記」を読んだ。幕末、大名預かりとなった旗本を、江戸から津軽半島の三厩まで見習与力が奥州街道を歩み、送り届ける物語。長い道中でふりかかる出来事が少しずつ2人の関係性を変え、濃密さが増していく…この物語の妙だが、人生の旅の重さとも重なり、心に残る旅をしたような、読後感にひたっていた。

（其田敏美）

◆光冠（コロナ）禍は、習慣交換化（臨機応変）。感染者の皆様には心からお見舞い申し上げると共に、それによって自粛を余儀なくされた身としては「禍福は糾える縄のごとし」の様に、前向きに、生活習慣を変えることが出来た。古本の整理（積ん読一部消）、運動不足近場処理（交通費節約）、更に文通見直し。それは、文学への関心につながると考え、随筆、日記、記録にも一考の余地再確認。

（横山隆一）

◆予定表が×だらけになって自宅で過ごす毎日は人に会うこともなく刺激もなく、心細い日々でした。でも私にはずっと続けてきた「音訳奉仕」というボランティア活動がありました。視覚に障害のある方々に向けての本の録音です。自宅で出来ることですので、自粛の日々の中で大きな励みになり私自身が元気になることに気づきました。これからも大事な活動の一つとして続けていきます。

（T・ITO）

◆街を歩けば避けよ三密！と大きなマスクの人人人。家の中で本を読めば「夜と霧」では一日に一度は必ず笑って死の恐怖から奇跡的に生き延びた。「デカメロン」では一日に一人一話ずつ物語を話してペスト大流行を生き延びた。今はマスク時代で笑顔が見えない。うれっ子モデルもマスクが重要だが、心から笑う（目力）と顔が笑う、脳が笑う。笑って心豊かな歓びの生活を願う（医笑同源）。

（宗田淳）

◆辞職後ツン読本整理中に古びたノートが出てきた。現職研究昭和四八年とある。女子大での受講記録だ。開くと、本田和子、周郷博、田口恒夫、津守真など懐かしい名前が連なる。棟方志功講義録には～本物でない所に棟方はある～当時の私理解のほどは如何に？　外山滋比古「ことばの感覚」も受講していた。済みませんと手を合わせる。各氏の声やお姿、自分までも蘇る。渦中に頂いた「福」。

（津）

◆外出嫌いのわたしでも、月に何度かは出かけているものだ。何処にも行けず、誰にも会えないコロナ生活が3ヶ月を過ぎると、次第に落ち着かなくなって来た。時間はあるのに何をしても中途半端、忘れものをしているような焦りが付きまとう。思いついてヘッドホーンを付けて音楽を聴いてみた。ひたすら耳と心に集中する。雑念なしでこれがよかった。古いCDもずいぶん聴いた。

（N・S）

◆外出自粛と言われても、主婦の生活に大きな変化はない。いつもの暮らしをいつものように続けている。少しだけ食事のバランスに気を配ったり、ハンドソープの減り具合を気にしたりするだけだ。粛々と日々の暮らしを維持し続ける。そんな中で思ったことがある。槍が降ろうと、新型ウイルスが流行ろうと、最悪戦禍に巻き込まれようと人間は生き延びてきた。私たちって結構すごい生き物なんだな、と。

（N）

「新型コロナウイルス感染症」現在までの状況

2019年12月に中国武漢で発生した原因不明の肺炎は、猛烈な勢いで感染し、2020年、世界中に猛威を振るうことになる。3月11日、WHO（世界保健機構）は「新型コロナウイルス感染症」のパンデミック（世界的大流行）を宣言した。

世界中で入国拒否、移動制限がされるようになり、日本では2、3月には外出の自粛が始まる。マスクは必需品となった。4月16日、政府の「緊急事態宣言」発出により全国的な外出自粛、学校の休校、施設や店舗の使用制限、イベントの中止、デパートの休業、在宅勤務の推奨と、ステイホームを余儀なくされ、経済活動に大きな被害が出る。失業する人も増え続けた。（宣言は5月25日解除）

7月開催予定だった東京オリンピック・パラリンピックは1年延期となり、仙台市では青葉祭り、七夕、ジャズフェスなどすべての行事が中止になる。

※2020年11月1日現在の世界の感染者は4千7百万人、死者は120万人を超えた。日本では感染者10万人、死者1700人超である。